

## 生徒（生活）指導（学級づくり）研究部会

- I 研究テーマ 統一テーマ 「望ましい生徒指導のあり方について」  
学級づくり部会テーマ 「子どもどうしのつながりをどうつくるか」

### II 研究テーマ設定の理由

昨今、学級が抱える問題は、いよいよ多岐にわたっている。そんな中、揺れる子どもたちの向こう側に見え隠れするのは、子どもどうしの人間関係の希薄さである。昔は、特に意図的ではなくとも家庭と地域、さらに学校とが一体となって、子どもたちにコミュニケーション能力を培い、人間関係を構築させていく場を提供していた。当時は、それが当たり前であった。それが、長い月日の中で薄れていってしまっている。

今の子どもたちを見ていると、物事を多面的に見る目とか、わき上がってくる感情をとりあえず抑え、なぜそうなったのかを確かめようとする態度とかが極端に未発達である子どもが多いことに驚く。例えば、だれかが自分の鉛筆を落としたとする。気づいた時点でとにかく激怒してしまう。つまり落とされたこと それ自体に腹を立てているのだ。本来ならば一番の関心事となるはずの、「落としたことに悪意があったのかどうか」にはあまり関心がなさそうに見えることも多い。つまり、相手の行為の意図を確かめようとする子どもが少なくなった。だから、トラブルが起こってしまったとき、関係する子どもたちを集めて話を聞いてみても、結果としての行為（言動）に対しては目に涙をため、今にも殴りかからんばかりの怒りを覚えるものの、「相手がなぜそれをしたのかを自分自身で確かめたのかい？」と問うてみると、それをしてある児童はほとんどいない。だから、逆に（一概に悪いことではないとも言えるだろうが）担任がお互いの話を聞いた上で、「互いに謝罪し合って仲直りしようよ」と促すと、あっけないほどその提案を受け入れ、「ごめんね」を言い合い、その場で笑顔になってしまうのである。あの涙ながらの、手をださんばかりの剣幕はどこに言ってしまったのだろうと肩すかしをくうほどである。

つながりとは、言葉を交わすことが原点であり、そこから全てが始まる。上で紹介した事例には、言葉による交流（たとえその場ではお互いが傷つき合うことであったとしても）というものがほとんど感じられない。だから、すぐに怒るし、仲直りもする。それが子どもだろうという考えももちろんあるだろう。しかし、これほど短絡的な、言葉のない、つながりのない中で起こるトラブルは、上例のように簡単に解決すればそれに超したことはないが、場合によってはさらに大きな問題に発展してしまう危惧もあるだろう。「相手の身になって」「人の気持ちを考えてみよう」。昔から言われ続けられている言葉である。大切なことだと分かっているも、日々の教室で子どもたちと相対していると、さまざまな社会的要素・事象に翻弄される子どもたちに、となりの友だちとどう「よいつながり」をつくっていくことがいかに大切かは論ずるまでもないだろう。だが、我々教師集団もそれを構築するための特効薬などもってはいないのだ。だからこそ本研究会の研究員が日々の実践や学級の様子を出し合い、暗中模索の中、

少しでも悩める子どもたちとともに考え、たとえ小さくても助けの手をさしのべてやれることを目指し、今年度も「子どもどうしのつながりをどうつくるか」を学級づくり本部会のテーマに設定した。

### Ⅲ 研究の経過と内容

第1回（4月11日）は、慣例に従い、組織作り（役員人事、研究テーマ及び研究の進め方について）を行った。年々部員数も減っているとは言えないまでも、一桁の人数で推移している現状である（今年度は8名）。後述するが、これまでは、特に縛りのない学校生活・学級活動全般から横断的にレポーターが実践などの話題を選び、輪番制で一人一実践を提案していくやり方を探ってきた。そして、この第1回の研究会で、その具体的な活動計画を立てる。

第2回目以降（5/14 6/18 7/31 8/16 9/3 10/1 11/5 1/21）の計8回は、前述のとおり、一人一実践の提案となる。長年、本研究会に所属しておられる先生方も多い中、10年前のレポートと今のレポートを見比べてみると、その大まかな傾向の違いがはっきりと分かる。以前は、学級集団・学年集団を一つの単位として考え、個人差はあれど受け持った当初から徐々に担任の考える学級集団づくりを実行・実践し、浸透を図り、そこから子ども集団の変容を観察していくというのがほとんど疑う余地のない、当たり前ととらえていた集団づくりのレポートの基本的なスタンスであった。であるから、内容としては班づくりの方法や清掃分担の工夫、クラスの宝などの学級での取り組みの足跡を形ある物に残していくことの実践等々…。さらに、学級役員や班長などのリーダーの育成など、より自治的な活動を奨励していくための組織づくりなどもあり、一個人の子どもについてのみのレポートなどほとんどなかった。

それがここ数年は、各先生方からのレポートは、少なくとも学級集団づくりについての実践と個別に課題を抱える「A君」「Bさん」の2本立てがほとんどであり、時には後者のみのレポートも珍しくなくなった。内容を読むと、その子は、複雑な生活環境に置かれていることがよく分かる。もちろん保護者だって一生懸命に生活している。それでも複雑に絡み合うその子どものバックボーンが大きな要因となり、他の子どもたちに比べ、よくない面で目立ってしまう現状がある。当然その子どもも学級の一員であるからその子がうまく学級に溶け込めるようになるまでは、場合によってはそこに主眼を置かざるを得ず、学級全体で取り組もうと考えている腹案もどうしても後回しになってしまう。研究会の中で、実践報告をしてくださる先生方のレポートも大同小異と言わざるを得ない。そして、そこがそのまま10年前と現在の学級の実態の差異そのものなのではないだろうか。そう考えると、これまでのわたしたちは、集団から大きく逸脱する子どもがほとんどいない中で実践を積み上げてこられたと考えることもできる。どちらがスタンダードであるかは、もちろんここで話題にすべきことではない。大切なことは、今、クラスの一員であるその子どもがぎりぎりのところで日々の生活をやっとの思いで続けているのだという現状をきちんと認識することであろう。

#### IV 研究の反省と課題

毎回のレポートで常に話題となるのは、その課題を抱えた児童がどのような生活を送っているのかということである（もちろん、担任も全てを知っているわけではないし、そこで話題になったことは、メモ等は一切採らず、その場の意見交換の材料にするためだけのものであり、他言は無用が大原則である）。各教師が、これまでの経験からアドバイスを出す、それでも事情は十人十色。ましてや、原因の多くは学校の外にある場合がほとんどで、結局いつの場合も結論は出ないまま、参加している先生方も悶々と無力感を感じるばかりである。

そしてもう一つは、学級づくり部会であればこそその話題なのだが、学級の他の友だちとの関わりについてである。規則が守れない、暴力をふるうという中で、一見友だちとの関係も当然よくないだろうと予想されるが、子どもたちは、意外にも受け入れている場合も珍しくない。そこは、幼少のころから近所でともに遊んできた仲ということが非常に大きいのであろうことは想像に難くない。そういう課題のある子どもを集団の中に溶け込ませていく上での糸口となりそうである。

やはり結論がなかなか出づらいことに違いはないのだが、学級づくりをキーワードとしてその子へのアプローチを考えたとき、イベントなどの学級での催しを利用してその児童を巻き込んでいくのか、それともその児童が自覚を持って学校生活が送れるようになるまで働きかけをして、それが実を結んだときに学級としてのイベントが動き出すのか…。もちろん一概には言えないことだろうと思うが、最近よく耳にする「学校教育とは特別支援教育と同格である」という言葉が頻繁に頭をよぎるようになった。今の学級経営を進めていく上で、全くその通りであると深くうなずかずにはいられない。理想を追い求めるのは職業人、ましてや専門職としての教師としては至極当たり前のことではある。が、しかし、現状を見たときに、理想というのが、遥か遠くにかすんでしまいがちであることもまた事実である。どのレポートにも、教務の先生方を中心に、学校体制で、もしくはシフトを組んで、また市当局よりアクティブ加配をいただきたりとサポートをずいぶんといただいております。「ありがたい」という言葉は随所に出てきている。どの事例を見るにつけ、もはや担任一人の力でできる対応の許容範囲は超えてしまっていることを物語る。それでも、まさに「今日起こった」生々しい教室での出来事を目の当たりにした教師から直接話を伺い、また、中学校の先生もいらっしゃることから、漠然とではあるが、中学校で課題を抱える子どもたちの小学校時代を聞くにつけ、言動に重なりがとても多いことにも気づかされる。確かに小学校と中学校は「続いている」のである。だからこそ、小中連携は、子どもたちの健全な育成になくってはならない重要なファクターなのである。冒頭で特効薬などないと言ったが、それでも、経験を積んだ教師が集まれば必ずよい知恵は浮かぶ。少なくとも、気が重くなるような、現在の学級での課題を共有し合うことだけでも、それが明日への活力につながり、どんなに小さくても、遠い理想と目の前の現実を重ね合わせるための第一歩であると思う。